

水稻の育苗技術の基本

～ 健苗を育てるための **6** つのポイント ～

営農担当者向け



千葉県・千葉米改良協会・全農千葉県本部・千葉県米集連

令和8年2月作成

準備 ⇒ 種子消毒 ⇒ 浸種 ⇒ 催芽 ⇒ は種 ⇒ 出芽 ⇒ 緑化 ⇒ 硬化 ⇒ 田植え

ポイント1 育苗箱や浸種容器等の消毒

・育苗箱や浸種容器等はケミクロンG又はイチバンを使用して消毒します

① ケミクロンG

・1,000倍液の10分間浸漬か、500倍液の瞬間浸漬又はジョウロ散布とします
処理後は、水道水(きれいな水)で水洗し、水切り乾燥させます

注) ケミクロンGは、R7年5月に生産終了

R8年秋までは一般販売するが、在庫なくなり次第、販売終了

② イチバン

・500~1,000倍液の瞬間浸漬又はジョウロ散布とします

営農指導ポイント

作業場に残っている
稲わらや籾殻も病害虫の
発生源になります。
作業場や機械設備の
清掃が健苗育成の
第一歩です！



ポイント2 種子消毒を確実に！(自家採種の場合は、必ず塩水選をしましょう)

・発病後の治療は難しいので、予防のため必ず種子消毒を行います

・消毒は十分な薬液を用意(籾と薬液の容量比1:1以上 ⇒ 重量比では1:2程度)



営農指導ポイント

種籾4kgの容量は
約8リットルです！
重量比ではないので
ご注意ください！



営農指導ポイント 種籾全体が薬液に浸るよう、種籾の入れすぎに注意！

・所定濃度で十分な量の薬液を用意し、薬液水温は10℃以上15℃以下に保ちます

水温が10℃未満になると薬剤の効果が不安定になるので注意しましょう！

・種籾を水に漬けただけでは、種籾の周りに気泡が付着してしまい、その部分は薬液が付かず薬剤の効果にムラができます
薬剤の効果ムラを防ぐためには、種子袋を薬液の中で十分にゆすって中の気泡を追い出す必要があります



営農指導ポイント 種子消毒後の注意点

・ヘルシードTフロアブルなど、種子消毒後に風乾処理が必要な薬剤は、風乾処理が甘いと、薬剤の効果が十分発揮されない可能性があります

消毒後は、半日~1日程度陰干し(風乾)し薬剤付着率を高めます

・種子消毒の薬液は使い回しをせず、毎回新しいものを準備します
⇒使い回しにより病害が発生したと考えられるケースがあります！

・詳しい作業方法は「[全農ちば営農技術情報 種もみの種子消毒VTR](#)」で確認することができます

右の二次元コードより動画をご視聴ください(^^)



全農ちば営農技術情報
種もみ種子消毒VTR
▶4分間で播種までの
工程が丸わかりです！

ト解説（準備～催芽）

ポイント3 浸種の温度は10℃～15℃で！

- ・浸種時の水温が10℃未満になると、出芽の不揃いを招くとともに、発芽率自体も低下する恐れがあります
- ・浸種時の水温が20℃以上になると、細菌性病害の発生が助長され、また、発芽が早まり、芽が伸び過ぎる恐れがあります
- ・化学合成農薬による種子消毒を行った場合は、浸種開始して3日目から水交換を開始します
- ・浸種の終了の目安は、籾殻全体が透き通って銚色になり、胚部分が白く見える頃（右下写真参照）です

浸種期間の目安：10℃×10日～15℃×7日（積算水温100℃が目安）

※ふさおとめ、ふさこがねは少し長めの浸種が必要（水温10℃で12日、積算水温120℃が目安）

低温期のポイント

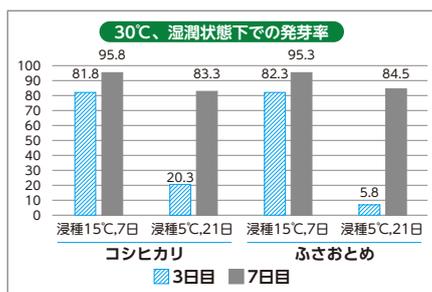
- ・水温が低下する夜間は保温シート等を被せるなどして、水温の低下を防ぎましょう
- ・浸種初日にお湯を入れる等により水温を15℃にした後に、浸種桶を保温シートや毛布等でくるんで保温すると、温度が持続しやすいです
- ・テクリードCフロアブル、モミガードC・DFを処理した種子を水温10℃未満で浸種すると、催芽や出芽が遅延、抑制される場合があるため、浸種時は水温10℃以上を確保しましょう
- ・ふさおとめ・ふさこがねは、低水温による発芽不揃いになりやすいので注意が必要です
- ・低温貯蔵種子は、水温が10℃未満になると出芽率が低下することがあるので、特に注意が必要です

気温が高い時期のポイント

- ・水温15℃以上では、発芽が始まり、催芽ムラの原因となるので、4月中旬以降の浸種では温度管理に気をつけましょう
- ・水温20℃以上では、細菌性病害の発生を助長します。細菌数を少なくするため、3日目から1日1回は水の交換を行いましょう
- ・天気の良い日は必ず日中の水温を測り、高い場合は遮光や換気により温度調節を行います



【解説】浸種の水温と発芽率の関係



左のグラフは、浸種の温度条件を変えて発芽率を調べた結果です。グラフからは以下のことがわかります

- ① 播種後3日目の発芽率（左側）は浸種の温度が低い程低く、浸種温度が5℃の場合、7日目の発芽率も低い傾向にある
- ② 浸種温度が5℃の場合、未発芽率も15%程度まで上がる

※ ふさおとめ・ふさこがねではその傾向が顕著なので要注意

左図：浸種条件が発芽に及ぼす影響（水稲の採種栽培 第4版 p.40 表1を元に作成）

左：浸種前



右：浸種後の種籾



浸種が不十分だと、発芽の不揃いに繋がります
ネットの中で見にくい場合も様子を確かみましょう！

ポイント4 催芽は確実に30℃（水温又は気温）で実施！

- ・出芽を揃えるため、浸種した籾は、育苗器や催芽器を用いて30℃で16～20時間を目安に加温し、籾がハト胸状態（幼芽長が1mm）になったら終了です
- ・催芽籾は、播種しやすいように陰干しするか軽く脱水します
- ・32℃以上の高温になると、細菌病の発生リスクが高まります

営農指導ポイント 催芽籾を保存したいんだけど・・・という相談を受けたら

- ・催芽籾を保存する場合は、短期の場合は冷蔵庫に、長期の場合はよく乾かして冷暗所に保管します
- ・使用する際は、発芽率が低下することを前提に播種量を増やします
- ・混種に気を付け、品種名を荷札等により付けておきます

催芽籾（ハト胸状態）



準備 ⇨ 種子消毒 ⇨ 浸種 ⇨ 催芽 ⇨ **は種 ⇨ 出芽 ⇨ 緑化 ⇨ 硬化** ⇨ 田植え

播種前に・・・ **営農指導ポイント** 品種ごとの育苗期の特性を再確認！

・県内で栽培されている各品種の標準的な栽植密度などは次のとおりです。

品 種	コシヒカリ	ふさこがね	ふさおとめ	粒すけ
栽植密度	15～18株/m ² (約50～60株/坪)	17～18.5株/m ² (約55～60株/坪)	18.5株/m ² (約60株/坪)	17～18.5株/m ² (約55～60株/坪)
株当たり 植付本数	3～5本	3～5本	3～5本	3～5本
補 足	他品種と比較して 苗が徒長しやすい	5月移植では 疎植栽培を 行わない	栽植密度を下げた 疎植栽培では収量 が著しく低下する ため、極端な疎植 は行わない	疎植にしないこと

播種前に・・・ **営農指導ポイント** その年の育苗期の天候を再確認！

- ・育苗期の天候（気温や日照時間）は年により大きく異なるため、毎年同じ時期に育苗をしても、低温対策が必要となったり、高温時の対策が必要となることがあります
- ・健苗育成には、『いつもどおり』ではなく、その年の気象に合わせた栽培管理が必要です！

ポイント5 は種時には、培土に薬剤を処理して病気を予防しましょう！

●用土の薬剤施用（は種前・は種時）

- ・育苗中は、温度や湿度が高い環境下であり、カビや細菌が発生しやすいので、防除効果のある薬剤で予防する必要があります
- ・特に、「もみ枯細菌病」を予防するため、は種時（覆土前、覆土時など）には、フタバロンA粉剤、カスミン粒剤、カスミン液剤のいずれかを適正に使用します
- ・用土はpH5.0～5.5に調整した市販培土を用います
- ・用土の量：床土20mm（4ℓ）
覆土5mm（1ℓ）

営農指導ポイント

平置き出芽する場合
育苗ハウス内の温度の確保が重要です

低温期の場合
は種を行う日は天候の良い日を選ぶとハウス内の温度を確保しやすいです



●は種（稚苗育苗の場合）

- ・は種量は、乾粃で1箱あたり130～150g、種粃1袋4kgで育苗箱26～30枚を目安にします
- ・催芽粃の重さは、乾粃重の1.25倍程度なので、1箱あたり165～190g程度です

ト解説（播種～育苗）

ポイント6 は種後～緑化期は床土温度のこまめな確認で適正温度をキープ

ハウス内の温度よりも、種子や苗のある被覆資材の内部や床土の温度に注意します

- 細菌性病害の発生予防のため、**床土の温度が30℃より高くないように**します
- 無加温（平置き）育苗**では、被覆資材によって出芽などに与える影響が違っているので、資材の特徴を確認し、資材に合った管理をしましょう

播種後の温度管理のポイント（稚苗）

		出芽（床土の温度）		緑化 （被覆内の気温）	硬化 （ハウス内の気温）
		加温出芽	無加温出芽		
日数の目安		2日	5日前後	2～4日	15～20日
温度	昼	30℃	20～30℃	20～25℃	5～25℃
	夜	30℃	10～20℃	15℃前後	10℃前後

営農指導ポイント

出芽期

- ・育苗期間中で一番温度を必要とする期間（しかし、30℃以上も×）
- ・育苗ハウス内に平置きして発芽させる無加温出芽の場合、被覆資材を掛け、資材の特徴に合わせた温度管理が必要です（被覆資材の特徴は以下のとおり）
- ・温度管理の際は、ハウスの被覆資材の状態にも気を配りましょう（張り替えたばかり、汚れている等々）



育苗ハウスの換気方法や使用する被覆資材の種類で育苗を失敗する事例は多く、「いつも通り」ではなく、その年に合った管理が必要です！

	高温時（晴天）	低温時（曇雨天）
遮光率の高い資材（太陽シートなど）	出芽は良好	出芽不揃いになりやすい
遮光率の低い資材（保温マットなど）	高温障害が出やすい	出芽はほぼ良好

営農指導ポイント

緑化期

- ・出芽苗を徐々に太陽光線に慣らすため、50%遮光した中で管理します
- ・緑化開始から半日程度は弱い光に当てて緑化させます
いきなり強い直射日光に当てると白化する場合があるので、晴天時は注意が必要です
- ・苗の草丈が伸びにくい「ふさおとめ」「ふさこがね」は、緑化期間を長めにとって草丈を伸ばすことで、その後の田植えがしやすくなります

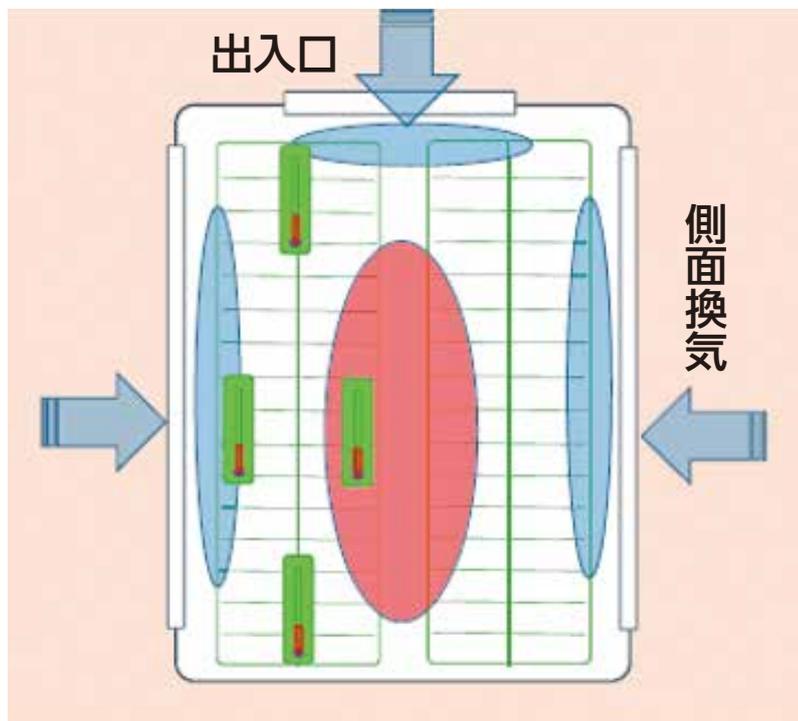
営農指導ポイント

硬化期

- ・徐々に温度管理を下げ、外気温に慣らします
- ・田植えをしても苗が傷まないよう硬く丈夫に育てるための管理です
育苗箱周辺の温度は昼間は25℃以下とし、夜間は最低5℃以上を保ちます
- ・硬化の前半は、日中1回たっぷり均一にかん水をします
水のかけ過ぎは軟弱苗や根張りが悪くなる原因となります
後半は必要に応じて日中1～2回程度のかん水とし、午後3時以降のかん水は避けます

① ハウス内の温度の上がりやすい場所、上がりにくい場所の把握

- 育苗ハウス内の温度は均一であることが望ましいですが、実際には均一ではないことが多く、温度が低い場所や高くなりやすい場所で病害や生育障害・不良が発生しやすくなります
- 次の図や解説を参考に、育苗ハウス内の温度の傾向を把握しましょう
(建物等で日陰になりやすい・風が通る・冷気がたまりやすい、等も把握しましょう)

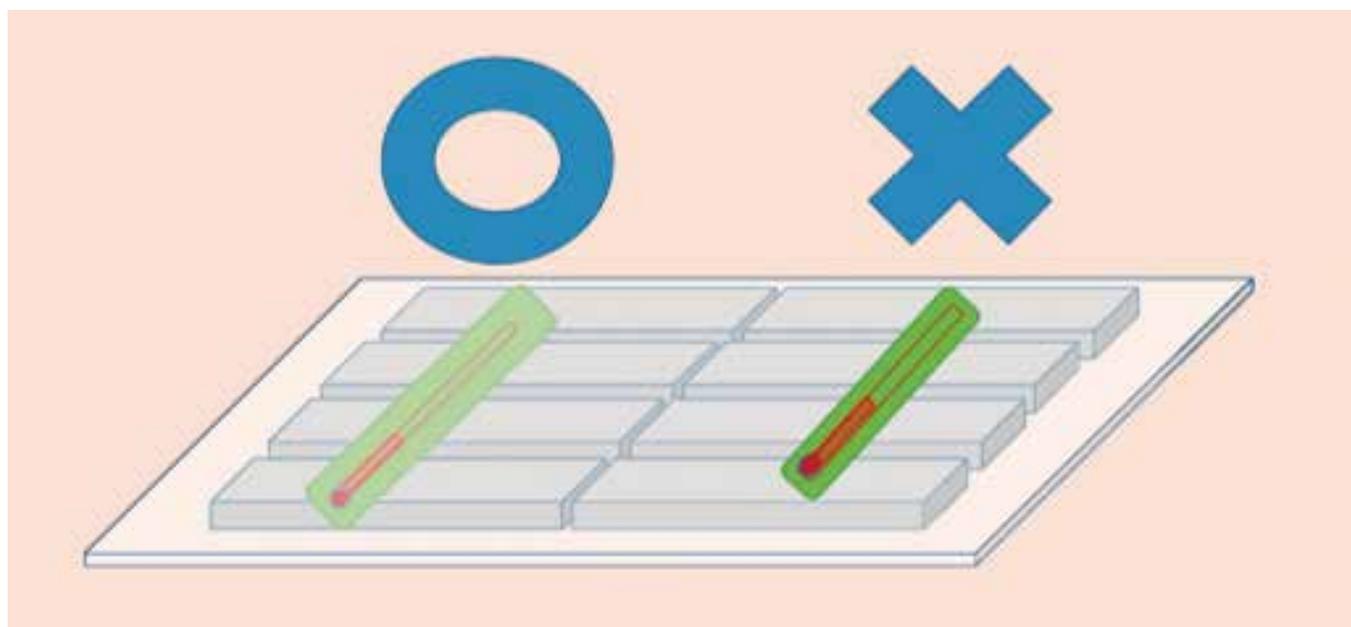


ハウス内の温度の傾向

- ・ 出入口付近や換気場所の近くの温度が上がりにくい
- ・ ハウスの中央部分や換気場所より上の空間など空気の動きがない場所は、温度が上がりやすい
- ・ 連棟ハウスの場合の軒下や、凸凹のある床面など水が溜まりやすい場所は温度が上がりにくい

② 種子や苗の温度の把握

- ・ 適正な温度管理とは、種子や苗のおかれている環境の温度を整えることです
- ・ 種子や苗の温度環境を把握するためには、温度計を被覆資材の中に入れて測定する必要があります
- ・ 被覆資材を除去した後は、苗と同じ高さに温度計を設置すると、苗周辺の温度を測ることができます



■育苗に関する相談を受けた場合には、以下の対応により原因究明へのご協力をお願いします

まず確認すること

- ☑育苗ハウスについて：被覆資材の張り替え時期、周辺環境
- ☑育苗方法について：浸種・催芽・出芽時の加温機器の使用の有無
被覆資材の種類
- ☑種子について：自家採種 or 購入先・種子の保証表の有無
購入種子の場合 ⇨ 「品種名」、「生産年度」、「生産者番号」、
「審査証印」に記載された農業事務所名、購入数量を確認

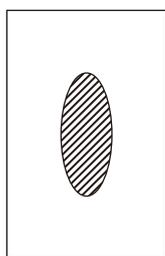
次に確認すること（ハウス内の発生状況の把握）

■症状がハウス内のどの位置で発生しているかで、原因を推測することが可能な場合が多いので、苗の症状を見る前に、育苗ハウス全体の状態を把握します

⇨ **全体の写真を撮る**

営農指導ポイント

ハウス内の発生位置から予測できる生育不良・障害等の原因



①ハウスの中央に被害が出る
⇨高温が原因である場合が多い

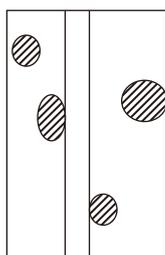
芽が出ない、白化するなどの症状が出やすい



②ハウスの周辺に被害が出る
⇨低温・風が原因である場合が多い

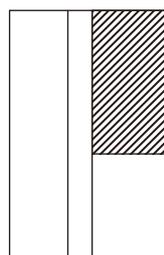
短い苗、ムレ苗等

2葉目痛み（褐変）乾燥による針状葉



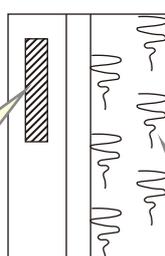
③スポット的に発生
⇨温度・水分が原因である場合が多い

- ・育苗箱下のビニールに水が溜まっていないか？（足跡等に水が溜まるとその部分だけ温度が変わる。多くの場合低温になる）
- ・自動灌水装置の不具合等（装置から漏れた水滴が落ちてくる）



④片側だけに発生
⇨品種・播種時期による違いが原因である場合が多い

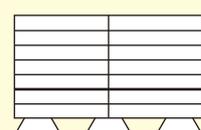
- ・催芽の状態の違い
- ・種子伝染性の病気
- ・種糞の事故



⑤規則的に発芽・生育が悪い
⇨播種時の水分等が関係する
場合が多い

地面が歪んでいる所育苗箱を並べた等（低い部分は水分が多くなり、高い部分は少ない）

積み重ね育苗を広げた時の生育ムラ等



上の方が発芽が良い
積み重ねは10段までとする

次に確認すること（育苗箱や苗の様子）の把握

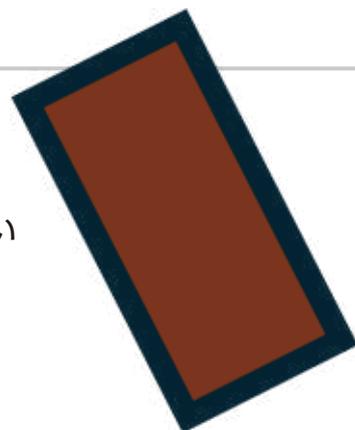
■ 症状が出ている育苗箱や苗の様子を確認します

① 出芽終了時期になっても発芽していない場合

- ⇒ ㊦ 胚が膨らまず死んで褐色になっている
 - ⇒ 収穫後の乾燥時に高温 or 蒸れて胚が死亡した可能性が高い
- ⇒ ㊧ 胚は吸水して膨らんでいるが透き通った色で生気がない
 - ⇒ 催芽又は出芽時の高温下で死亡した可能性が高い

対応

㊦・㊧ いずれの場合も、種のみき直し又は苗の調達

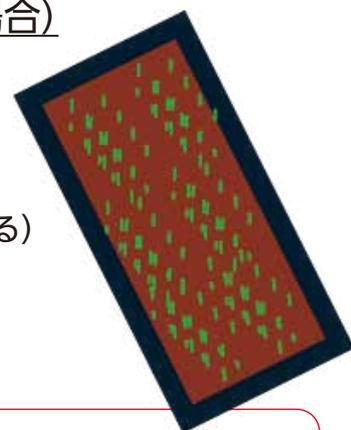


② 出芽率が低い（苗立ち数が少ない&ハウス全体が同じ症状の場合）

- ⇒ ㊦ 出芽しない粉は発芽していない（芽切っていない）
 - ⇒ 収穫後の乾燥時に高温 or 蒸れて胚が死亡した可能性が高い
- ⇒ ㊧ 出芽しない粉は発芽している
 - ⇒ 浸種時の吸水不足による出芽遅れ（時間をおくと出芽してくる）

対応

㊦ 種のみき直し又は苗の調達
 ㊧ 経過観察 ⇒ 必要に応じて種のみき直し又は苗の調達



営農指導ポイント

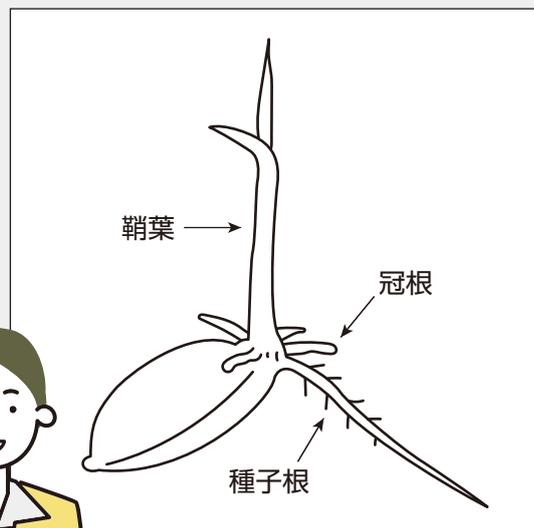
- ・ 温度管理が適正にできていないことによる出芽遅れ
 （例：平置き無加温育苗で出芽に必要な温度が確保できない等）の可能性もあります
- ・ ハウスの状態・被覆資材の状態等も合わせて確認してください

営農指導ポイント

発芽していない場合や出芽率が低い場合

⇒ 相談者に了解を得てから培土中の粉を取り出し、胚や芽の状態を観察しましょう！

- 胚を観察する場合には、粉殻を剥がして観察します
- 出芽を観察する場合はそのまま観察します
- ⇒ 正常に発芽している場合には、右図のように鞘葉と根が観察されます！



障害診断②～育苗箱や苗の様子

③箱内で出芽したところと、しないところがある又は出芽しても鞘葉の長さにもらがある

- ⇒ ㊦ 出芽不良が箱の中央部にかたよっている
 - ⇒ ㊸ (出芽時に) 積み重ねた下の方の箱にみられる
 - ⇒ 播種時のかん水量が多く、積み重ねによって余剰水が下方に集まり温度が上昇しないために鞘葉の伸長が遅れていることによる
 - ⇒ ㊹ (出芽時に) 積み重ねた上の方の箱にみられる
 - ⇒ 高温障害が考えられる
 - ⇒ ㊺ 平置きの場合、ビニール等の被覆資材をベタ掛けした
 - ⇒ 高温障害が考えられる



- ⇒ ㊱ 箱の周辺部に偏っている
 - ⇒ 高温障害が考えられる
- ⇒ ㊲ 苗の個体ごとに異なり、箱全体に散在している
 - ⇒ 水の吸水むらによる発芽不揃い
- ⇒ ㊳ 箱全体に白いかびの発生がみられる



- ⇒ ㊸ (A) 出芽時に箱全体が白いかびで厚く覆われる
 - ⇒ リゾプス菌による被害
- ⇒ ㊸ (B) 菌糸が疎で気中菌糸は多く、根の先端は異常肥大しやすい
 - ⇒ ムコール菌による被害

写真 リゾプス菌による被害
上：培土表面の様子
下：培土内の様子

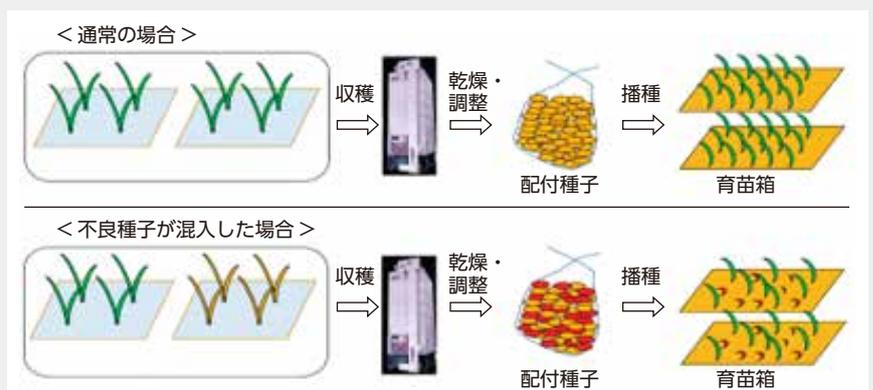
営農指導ポイント 種子が原因の発芽不良の場合の特徴

種子が原因の発芽不良の場合、次のような特徴があります

- ① 種子が原因の場合、育苗管理の影響を受けることはないため、1枚の育苗箱の中で、中央部分や端部分だけ発芽不良になることは考えにくい
- ② 同ロットの種子が配付された複数の生産者で同様の症状が発生する

お願い

相談対応の際は、発生している問題の原因が種子だと即断せず、本資料に沿って聞き取りを行い、農業事務所・生産振興課にご報告をお願いします



低温貯蔵種子利用時の営農指導のポイント

低温貯蔵種子利用時の育苗期の営農指導のポイントを解説します



- 低温貯蔵種子は、当年産種子と種子消毒・浸種・催芽スケジュール*は変わりません
- 低温貯蔵種子は、当年産種子と比較して、温度管理に注意が必要となりますので、次のポイントに注意して営農指導をしてください

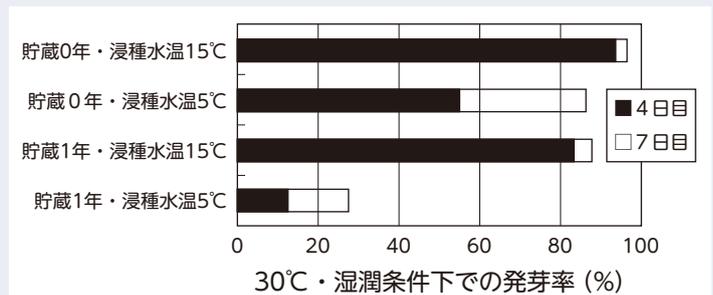
注意ポイント①

浸種水温

水温は、必ず10℃～15℃を保持するよう指導してください

- 低温貯蔵種子は浸種時の低水温(5℃)による発芽率の低下が、当年産種子より大きい傾向がある
- 低温期に浸種する場合は加温が必要

右図：種子の貯蔵年数・浸種水温と発芽率の関係
(水稻の採種栽培第4版、R5、千葉県他)



注意ポイント②

催芽・出芽温度

催芽・出芽時は適温 (30℃) を超えないよう指導してください

- 低温貯蔵種子は、当年産種子より育苗時の高温(40℃以上)に弱い傾向がある
- 低温貯蔵種子を利用する場合は、温度を正確にコントロールできる育苗器等を使うことが望ましい
- 無加温で出芽させる場合、催芽温度が高くなり、発芽率の低下が助長されるため注意が必要

- ※ 浸種は種子消毒後に実施する発芽を揃えるために10℃～15℃の水に浸漬させる処理で、積算水温で100℃程度(例：水温10℃で10日間、水温15℃で7日間)が適当
- ※ 催芽は出芽を揃えるため、浸種後の種粉を育苗器などで30℃に加温する処理
- ※ 化学農薬による種子消毒の浸漬処理時は、薬液の温度が低すぎると効果が低下するため温度を10℃以上に保つ
- ※ 低温貯蔵種子は浸種水温や催芽・出芽温度を適正温度にコントロールする必要があるため、配付の際は、浸種時の加温機器や育苗器の所有の有無を考慮すること

割れ粃の発生時の営農指導のポイント

割れ粃（開穎粃）とは・・・

- 出穂前の低温や日照不足などにより穎（粃殻）が小さくなり、その後の天候回復により肥大した玄米と穎（粃殻）の大きさがアンバランスとなり、粃の隙間から玄米が見えたり、粃殻が脱落して玄米の状態になったものです
- 割れ粃が発生している種子を利用する際の育苗期の営農指導のポイントを解説します

割れ粃（開穎粃）
粃の隙間から玄米が見える

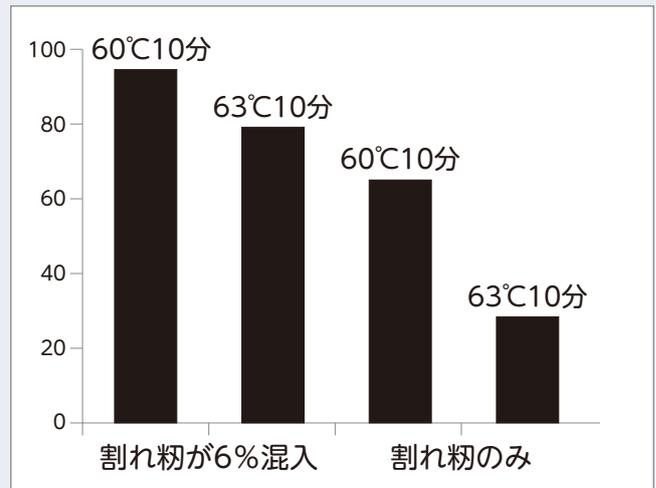


⚠️【注意】

種子に割れ粃（開穎粃）が含まれている場合は、温湯消毒を避け、化学合成農薬または微生物農薬による種子消毒を行うよう指導してください

※割れ粃は温湯消毒の設定温度が数℃上がるだけで発芽率が著しく低下します（右図参照）

図：割れ粃の発芽に対する温湯消毒の影響
（品種：ひとめぼれ）
（出典：宮城県古川農業試験場試験結果）



◆温湯消毒を行わざるを得ない場合は、以下のポイントを遵守してください

ポイント1 温湯消毒は、適切な浸漬水温・時間を厳守してください

温湯消毒は、種粃 1 k g 当たり 20 リットル以上の湯(60°C)を用意し、種粃を正確に10分間浸漬します。処理後は速やかに冷水で冷やします

ポイント2 薄まきを避け、標準は種量で「は種」してください

「ふさおとめ」やもち品種は温湯消毒により発芽率が低下する場合がありますので、標準は種量の上限量を目安に「は種」してください。
（標準は種量（稚苗）：1箱当たり乾粃130～150g）

水稻の育苗技術の基本 ～健苗を育てるための6つのポイント～

水稻の苗作りは「苗半作」と言われるほど重要で、健苗の育成が作柄を左右するばかりではなく、品質にも大きな影響を及ぼします。育苗期の気象は、年により大きく変わります『いつもどおり』ではなく、今年の気象に合わせた栽培管理を行い、健全な苗を育てましょう!!

ポイント1 育苗箱や浸種容器等の消毒

- ・育苗箱等の資材には病原菌や多くの雑菌がついており、病気の要因となる可能性があります
- ・育苗箱や浸種容器等は、あらかじめ洗浄し、使用前に消毒してください

ポイント2 種子消毒を確実に！(自家採種の場合は、必ず塩水選をしましょう)

- ・発病後の治療は難しいので、予防のため必ず種子消毒を行います
- ・所定濃度で十分な量の薬液を用意し、**薬液水温は10℃以上15℃以下に保ちます**
↓水温が10℃未満になると薬剤の効果が不安定になる
- ・効果ムラを防ぐため、種子袋を薬液の中で十分ゆすって中の気泡を追い出します

確認しましょう!

種粉4kgの容量は約8リットルなので、**種と薬液の容量比1:1以上**⇒重量比では**1:2程度**です



ポイント3 浸種の温度は10℃～15℃で!

- ・浸種時の**水温が10℃未満になると、出芽の不揃いを招く**とともに、**発芽率自体も低下**する恐れがあります
- ・浸種時の水温が**20℃以上になると、細菌性病害の発生が助長**され、また、発芽が早まり、芽が伸び過ぎる恐れがあります
- ・化学合成農薬による種子消毒を行った場合は、浸種を開始して3日目から水交換を開始します
- ・浸種の終了の目安は、**籾殻全体が透き通って銚色になり、胚部分が白く見える頃**です

浸種期間の目安：10℃×10日～15℃×7日
(積算水温100℃が目安)

※ふさおとめ、ふさこがねは少し長めの浸種が必要
(水温10℃で12日、積算水温120℃が目安)



ポイント4 催芽は確実に30℃(水温又は気温)で実施!

- ・出芽を揃えるため、浸種した籾は、育苗器や催芽器を用いて**30℃で16～20時間**を目安に加温し、**ハト胸状態(幼芽長が1mm)になったら終了**です
- ・催芽籾は、播種しやすいように陰干しするか軽く脱水します
- ・32℃以上の高温は、細菌病の発生リスクが高まります

催芽籾(ハト胸状態)



ポイント5 は種時には、培土に薬剤を処理して病害を予防しましょう!

- ・は種時(覆土前、覆土時等)には薬剤を処理し、糸状菌(カビ)による苗立枯病や「もみ枯細菌病」、「苗立枯細菌病」などの病害を予防しましょう

播種日を決めるときのポイント

- ・平置き出芽する場合、育苗ハウス内の温度の確保が重要です
- ・低温期の場合、は種を行う日は天候の良い日を選ぶとハウス内の温度を確保しやすいです



ポイント6 は種後～緑化期は床土温度のこまめな確認で適正温度をキープ

- ・ハウス内の温度よりも、種子や苗のある遮光シートの内部や床土の温度に注意します
- 細菌性病害の発生予防のために、床土の温度を30℃より高くしないようにしましょう
- 平置き育苗では、被覆資材によって出芽などに与える影響が違うので、資材の特徴を確認し、資材に合った管理をしましょう